

東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター Newsletter

多言語・多文化 教育研究

Multilingual Multicultural Education and Research

URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>

特集

多文化コミュニティ教育支援室の活動から
見えてくるもの

No.7

2008(平成20)年4月

CONTENTS

- P.2…【教育】人とつながること、世界と
出会うこと—支援室のボランティア
活動に参加した学生の声—
- P.6…【研究】世界の多言語・多文化社
会研究がスタートします
(連載)世界の多言語・多文化ほか
- P.7…【社会連携】在日ブラジル人児童
むけ教材開発プロジェクト
掛け算教材を公開しました!!ほか

国際理解教育 留学生と日本人学生が
ペアで授業に参加

東京外国語大学の校舎の
なかに、いつも学生たち
の賑やかな声であふれて
いる部屋があります。
知らない人が近くを通
ると、「あの部屋ではい

ったい、何をやっているんだろう？」

と不思議に思われることも。学生だけではなく、

大学院生や教員もはっきりなしに出入りしているこの
部屋は「多文化コミュニティ教育支援室」。多言語・多
文化社会に関わるボランティア活動に取り組む学生た
ちの支援基地です。

多言語・多文化教育研究センターの教育活動は、本学
の正式な講義科目であるAdd-on Program「多言語・
多文化社会」と、学生の課外ボランティア活動をサポ
ートする多文化コミュニティ教育支援室から成り立って
います。大学生たちの主な活動は、地域の小中高等学
校や学習教室などに赴き、外国につながる子どもたち
の勉強や日本語を助ける「日本語・学習支援」や、地
域の小中学校の先生方といっしょに異文化理解・国際
理解を促進する授業のプログラムを作成し、実際に学
校で授業を行う「国際理解教育」の実践をすること
です。

支援室に登録している学生は、341人(3月31日現在)
で、25の専攻語(英語、ドイツ語、フランス語、イタ
リア語、スペイン語、ポルトガル語、インドネシア語、
マレーシア語、フィリピン語、タイ語、ラオス語、ベ
トナム語、カンボジア語、ビルマ語、ウルドゥー語、ヒ
ンディー語、アラビア語、ペルシア語、トルコ語、ロ
シア語、チェコ語、中国語、朝鮮語、モンゴル語、日
本語)におよびます。留学生も11カ国46人が登録して
おり、国際理解教育の実践では、留学生を含む数人が
チームを組み、そのうちの学生1人がコーディネーター
となって活動を進めていきます。学習支援も専攻語を
活かした活動として学生主体で行われていますが、現
場での体験をより有益なものとするために、支援室
では実践的知識やスキルを学ぶ「多言語多文化共生
学講座」や大久保や川崎でのスタディ・ツアー、昼休
みビデオ学習会などを国際理解教育専門員や学習支
援専門員のアドバイスを受けながら実施しています。

こうした講座、スタディ・ツアーなどへの参加や実
際に地域に出て行っている活動から、学生たちは、ど
んなことを学び、感じているのでしょうか。

本号では、学生たちの声を中心に、支援室の活動が
教育プログラムとしてどう機能しているのかを紹介し
ます。

人とつながること、世界と出会うこと



— 支援室のボランティア活動に参加した学生の声 —

ボランティア活動をつうじて、学生たちは大学の内外でさまざまな人たちと出会います。そうした出会いが人と人をつなげていき、その「つながり」から学生たちは多言語・多文化化する社会の現実の一端に触れることになります。そうした経験から複雑な社会の様相やそのなかで生きる自分自身を見出しながら、学生たちは、やがて大学で学ぶことの意味を再発見することになるのです。

今回の特集では、国際理解教育の活動をしてきた学生たち、また、日本語・学習支援活動に関わっている学生たちが、それぞれの活動を振り返るために開いた座談会で語ったことの中から、学生たちがボランティア活動から何を学び取っていったのかを紹介します。

国際理解教育と日本語・学習支援の活動から見てきたもの

— 座談会での話し合いより



■参加者

- 阿部 靖子（朝鮮語専攻4年）
- 石井あかり（大学院1年）
- 大島 里恵（英語専攻3年）
- 門脇 弘典（フランス語専攻4年）
- 小島 和美（ヒンディー語専攻4年）
- 柴本 智代（カンボジア語専攻2年）
- 清水 有希（スペイン語専攻1年）
- 周 首能（朝鮮語専攻3年、中国籍）
- 曾田 茜（ペルシャ語専攻2年）
- 高木亜麻子（フランス語専攻2年）

- 田村かすみ（スペイン語専攻2年）
- 鳥居 美希（ペルシャ語専攻2年）
- 中村 恵理（スペイン語専攻3年）
- 萩原絵理香（トルコ語専攻2年）
- 朴 鎬泫（日本語専攻2年、韓国籍）
- 山田 洋平（大学院1年）
- 吉原 裕美（マレーシア語専攻2年）

■進行

- 河北 祐子（学習支援専門員）
- 木下 理仁（国際理解教育専門員）

子どもたちに何が残るのかという疑問があります。授業でやったことが、1週間もたたないうちにほとんど頭に残っていないような気がしなくもない。



国際理解教育の授業の中で、留学生と触れ合いながらさらにその人の出身国についていろいろ紹介をするんですが、そもそも小中学生って、国際社会や外国について、どれぐらいの知識があるのか。子どもたちから質問を受けながら答えていたんですが、その質問の内容といい、自分が答えた内容といい、じゃあこの子どもたちは中国のことを分かったかということ、たぶん何も分かっていないと思う。楽しかったという感想は出るんですが、何を学んだかということ、かなり疑問が残る。



（朴）でも、分からないから国際理解教育をやるんじゃないかなと思うんです。僕も子どものとき、地球の中心が韓国だと思

っていて、何で他の国は韓国語で話さないのかとか思っていたことがありました。たぶんここにいる皆さんも、この大学に入ってその国について学ばないですか。それでも勉強して分からないことがあって、だから小学生が分からないのは当たり前だと思うんです。分からないから教えようとするのではないのでしょうか。

（阿部）種を植えればいいんじゃないかなと

■活動に参加してよかった！



（門脇）国際理解教育で、2年前に授業を行った学校の子どもたちを今年も担当することになったんですが、学校に行ったら子

どもたちがみんな僕のことを覚えていてくれて、それがすごくうれしかったです。

（朴）私、子どもがちょっと苦手で心配で（笑）。でも実際に行ってみたら楽しくて。

（阿部）普通外部から人が来るとちょっと抵抗感って出ると思うんですけど、子どもたちが素直に受け入れてくれたので、それはすごくよかったと思います。

（柴本）府中国際交流サロンでクリスマス会をやったときに、来て間もなかった小学校5年生の男



府中国際交流サロンで学生とゲームを楽しむ子どもたち

の子が、まだ日本語もおぼつかないんですけど、うれしそうにサンタに扮した教員からもらった帽子をかぶってそのまま帰っていったときは、ああやってよかったなと思いました。

（萩原）しかも、帽子だけじゃなくてひげももらって（笑）。



（鳥居）私は、イラン出身の生徒の学習支援をすることになったんですが、先生から、全然自分からはしゃべらない子なので精神的な

ケアもしてくださいと言われて、何もしゃべってくれなかったらどうしようと思ったんです。社会の授業で日本のことや世界の国のことをやっていると聞いたので、それについて何かやろうと思ってイランの本を持っていったら、すごく興味を持ってくれ、本が好きな子なので自分からいろいろ話しかけてきてくれて、それはうれしかったです。

■わたしたちの活動って、ほんとに役に立っているのかな？

（周）国際理解教育の実践をやって、結局



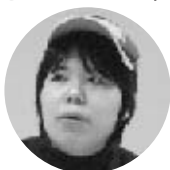
国際理解教育 学生の作ったカードで授業実践



思います。子どもたちが将来、例えば大学生になったときとかに、ああ、ああいう授業もあったな、こういうことも言ってい

たなと思ってくれれば。

(田村) ちょっと残念だった点が、先生と私たちの授業の目標にずれがあったということでした。私たちはとにかく「人」を理解してもらいたいという気持ちがあったんですけど、先生たちは子どもに「国」を理解させたいという気持ちがあって、とにかく韓国のことを紹介してもらいたいとか、ブラジルのことを紹介してもらいたいって、その辺が非常にしんどかったです。「国を分かる」というのは、私たちがやりたいのとはちょっと違うと思っていて、子どもたちに国の違いを教え込むというんじゃなくて、誰かと出会ったということが大事なのかなと思います。



(中村) いろいろな生徒がいて、生徒によって何を求めるかというのは違ってくると思うんですけど、少なくとも何かのきっかけになれば、成功したって言えるんじゃないかなと思います。

(門脇) 将来何かあったときに考えるきっかけというので、たとえ覚えていなくても、思い出せるくらいでもいいと思うんです。それは、例えば、中国ではこういう生活をしているという知識かもしれないし、あのとき会った周さんはとても楽しい人で、今度中国の人と会うけど、また楽しい人かなって思ったりとか、そういうふうには子どもそれぞれ違うと思うけど、何かしら残っているのではないかと考えてやっています。本当に忘れちゃう子もいるかもしれないですけど、それは仕方ないですね。やっぱりこの授業だけで子どもの考えとか生き方が変わるわけじゃないので、残る子がいればそれでよかろうと思います。

多文化社会の複雑さを、子どもたちに伝えたい

(周) 去年小学校6年生に国際理解教育をやったときに、「人の移動」というテーマで、フランス人の留学生が移民の問題を取り上げたんです。そのときちょうどクラスに1人中国人の子どもがいたので、私はその場で彼を題材にして、今日本も同じような現象が起こっていますよ、実は皆さんの周りにも、ほら、こうやって身近に外国人の子どもがいるよ、みたいな話をしました。それで初めて、ああそうだ、この子は本当は中国人だったんだというような反応をする子もいたので、逆にそういう外国籍の子どもの存在をうまく取り入れた授業案を考えるのも、ひょっとしたら国際理解の上でいい効果が出るんじゃないかなと思います。

(木下) 自分が子どものころを思い返すとどうだった？中国のことをどう扱われたかとか。

(周) 私が中学生のとき、地理の授業で中国のことが出ると微妙にうれしく感じたんです。自分の国のことを、今みんなが学んでいる。しかもそういうときって、先生からもいろいろ質問されたりして、わりと楽しい。自分の国についてみんなが今学んでいるというのが、悪い気がするというよりは、結構気持ちいいものだとは感じた。

(木下) 日本と比べて貧しいとかいう否定的な側面が出てきた場合は？

(周) それはそれで、別に構わない。国際理解教育に関しては、やはり授業案を考えるとときも気を使う部分がありまして、例えば政治的な部分や歴史的な部分をどうしても避けて通るようにしているんです。でも、楽しくやろうという以上に、もうちょっとシリアスな問題を、特に中学生相手にだったら扱ってもいいんじゃないかなと思う。だって、彼らもいずれ中学や高校で歴史や政治を学ぶのですから。子どもだから、小学生だから中学生だからそんなことを教える

るのはやめよう、とりあえず楽しくやろうというのは、ちょっとどうかと個人的に思う。

(中村) 生徒の中にペルーの子がいて、その子が関心あるかなと思って、あまり考えずにペル

ーという国を題材に選んだんですけど、あとでその子に感想を聞いてみたら、「よかった」「ありがとうございました」と言ってくれました。その子は小さいころに1回だけペルーに行ったことがあるそうで、ペルーの貧しい部分を強調しちゃったからどうだったかなと思って聞いてみたんですけど、「ペルーにまた行きたい」と言っていたので、よかったのかなと思いました。



(石井) 逆に言えば、そういうふうに「貧しい」ということだけでも分かったということとか、話題にされたというだけでも、考えるきっかけを与えるという意味では大きいんだろうかなと思います。



(中村) 自分たちの価値観を子どもたちに押し付けないように気をつけつつも、ある程度は、やっぱりこうなんだというのを示してあげないと、小学生には難しい授業になっちゃう。その兼ね合いが難しかったです。

大学で学ぶことの意味を、大学の外で見つけた

(小島) 私が学習支援をしていて思ったのは、勉強の前にまず精神的な安定というのが、学習に対しても、あと生活を送る際にもすごく大切だということを思いました。私が担当していた子は、たぶん分からないから嫌なんでしょうね。授業中教科書とか見ようとしなくて、見なさいと強制しちゃうともう机の中にしまっ伏せてしまったりとか、まったく言うことを聞かなくなってしまうという子だったんです。でも、それは始めのころで、繰り返し支援に行っているうちに、だんだん私にも慣れてきました。



日本語だと、子どもが表現できる内容がすごく限られちゃうんですよね。でも、私が英語で聞くと、どう思っているとか、どう感じたとか、すごくたくさん話すんです。英語で話しかけたとき、日本語で話しかけたときの彼の印象というのは、まったく違いますね。担当の先生も、その子がだいぶ落ち着いてきて、前よりも勉強に取り組むようになったとおっしゃってくれました。



(柴本) 私はもともと日本語の先生になりたくてこの大学に入ってきました。日本語を教えてみませんかという府中国際交流サ



小学校での実践にむけてミーティングを行う学生たち



外国語で学習支援をするための共生学講座

ロンの紹介文を見て、やってみたいと思
い参加して、そこで初めて外国につながる子
どもたちの存在を知ったんです。接してい
るうちに、自分はちゃんと日本語を教えら
れないし、おしゃべりとかしているだけだ
し、これでいいのかなと思う時期もあつた
んですけど、担当している子からたくさん
話せてよかったと言ってもらえたり、あと、
その子どもたち同士で何か和気あいあいと
楽しそうに遊んでいる姿とか、そういうの
を見ることができて、勉強を教えるだけじ
ゃなくそういう子どもたち同士でちゃんと
つながり合える場になっているんだと思
いました。

（河北）曾田さんは、国語の教科書を子
どもに教えてほしいと言われたんですよね。

（曾田）そうですね。『スーホの白い馬』と
いうお話なんですが、じゃあこれを教えて
ねと小学校の先生から当日教科書を渡さ
れ、最初は私が日本語をそのまま読んで簡
単に言い換えてみようと思ったんですけ
ど、途中で「日本語は難しい」と言って投
げられてしまいました。その日はそれで終
わっちゃって河北さんに相談したら、じゃ
あ紙芝居を使って簡単なペルシア語訳を付

けてやればいいんじゃないかとアドバイスを
受けました。結局絵本を借りてきて、ペル
シア語訳にして持っていったんですけど、
絵で見たら結構分かってくれるんです
ね。簡単な日本語と、覚えてほしい単語
はペルシア語に訳して、それで教えたら集
中して聞いてくれて、「面白かった」と言
っていました。

（河北）やっぱり母語の強みですね。絵本
だけでも母語を使うと違うんですね。

（曾田）あと、Add-on Program「多言語・
多文化社会」の授業は結構履修していたん
ですけど、やっぱり大学で勉強するのと実
際現場に行って勉強するのは違うと思
いました。もっとちゃんと勉強しておけばよ
かったと思います。

（紫本）私は、将来日本語の先生になれた
らいいなと、ただ漠然と考えてこの大学に
入ってきたんです。でも、府中サロンの活
動などをするようになって、外国につな
がる子どもたちの存在を知り、将来この子
たちにもっと身近でサポートできる存在に
なれたらいいなということで、自分の進む道
を発見することができました。子どもたち



マンツーマンで学習支援

とこういうつながりを持ってなかったら、将
来の道もまだ見つけられていなかったと思
うので、やってよかったなというのはすご
く感じます。

（萩原）私はもともと言語学に興味があっ
て、この大学に入学したんです。だから、語
学は勉強のためみたいな感じだったんです。
でも、こういう活動に参加してから、語学
を勉強する意味を、ただ勉強するだけじゃ
なくて、人のために役立つというところ
にも見つけられて、それがすごくよかった
なと思いました。将来専門家の道に進むと
は限らなくても、例えば自分がもっと大き
くなって、結婚して子どもができたりし
たときに、外国につながる人が身近にいた
ら理解できるし、そういう人の存在を分
かることができる。狭い分野でずっと語学
の勉強をしていたのが、もっと広い社会
的な意味があるんだなというのは思いま
した。



（山田）僕は、子どもだっ
たらその環境に入ってい
まえば言葉を習得するの
は簡単なものだと思っ
ていたんです。実際一般論

ではよくいますよね、若ければ若いほど
言葉をすぐ習得するって。でも、実際はそ
んな簡単に片付けられる問題ではなく、人
間関係や本人の意欲などいろいろ難しい問
題もあるということが分かりました。僕は
日本語教育にもともと興味があったんです
けど、この活動と出会って、外国につな
がる子どもたちに対する日本語教育がどう
あるべきかということを改めて考えるきか
けとなりました。答えが見つかったわけ
じゃないけど、今後考えていきたいと思
うようになりました。

多文化コミュニティ教育支援室の活動

— 今後の展望と専門員からの一言 —

本センターでは、ボランティア活動を教育プログラムの一環として位置づけ、積極的に支援しています。それは、多言語・多文化社会日本に貢献する素養を身につけるうえで、ボランティア活動が学生にとって重要なきっかけを提供すると考えているからです。人と人が文化を越えて理解しあい、対話しあうことの苦しみと喜び。何かを表現し、伝えることの難しさと楽しさ…学生たちの言葉からもうかがえるように、ボランティア活動は大学の講義では得られない学びを学生にもたらしくれます。こうして地域の現場と大学が学生をつうじてつながることで、本学や本センターの教育活動はより広がりのあるものになっていきます。

学生たちの声から、支援室の活動がもたらすダイナミズムを感じ取っていただけたのではないのでしょうか。

ボランティア活動といえども、社会に出て活動するからには責任がともないます。国際理解教育や日本語・学習支援の現場で適切な貢献ができるように、学生ボランティア活動の質をいっそう高めていくことは支援室の大きな役割です。他方で、ボランティア活動は文字通り「ボランティア（自発的）」であることが必要です。学生たちが主体的に活動に参加するように今後も促していくことが、支援室の活動をいっそう充実させていくために重要になってくるでしょう。

Add-on Program

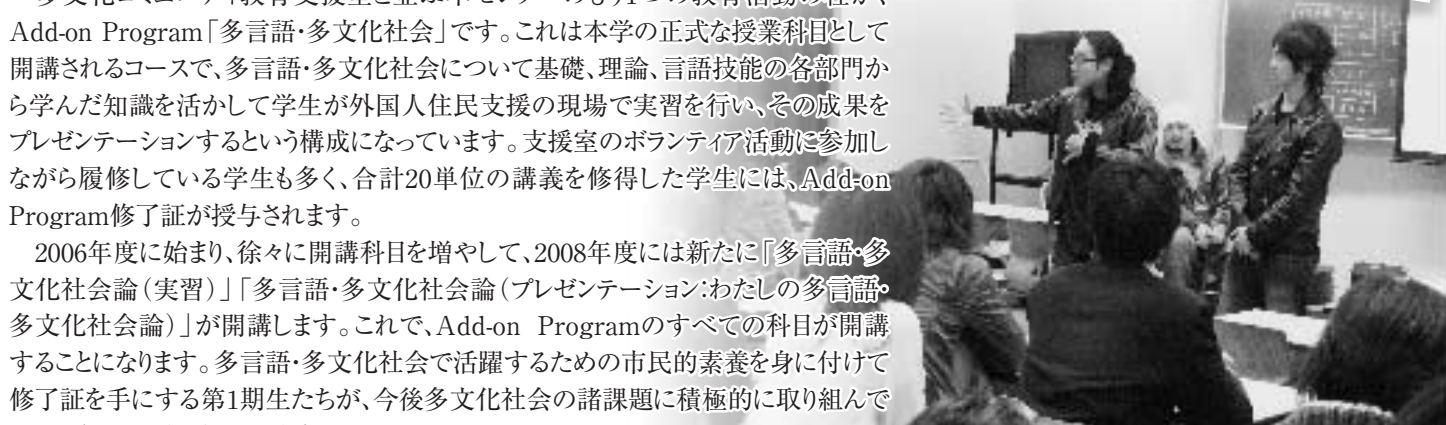
「多言語・多文化社会」

— 今年度、いよいよ全講義が開講します！ —

多文化コミュニティ教育支援室と並ぶ本センターのもう1つの教育活動の柱が、Add-on Program「多言語・多文化社会」です。これは本学の正式な授業科目として開講されるコースで、多言語・多文化社会について基礎、理論、言語技能の各部門から学んだ知識を活かして学生が外国人住民支援の現場で実習を行い、その成果をプレゼンテーションするという構成になっています。支援室のボランティア活動に参加しながら履修している学生も多く、合計20単位の講義を修得した学生には、Add-on Program修了証が授与されます。

2006年度に始まり、徐々に開講科目を増やして、2008年度には新たに「多言語・多文化社会論(実習)」「多言語・多文化社会論(プレゼンテーション:わたしの多言語・多文化社会論)」が開講します。これで、Add-on Programのすべての科目が開講することになります。多言語・多文化社会で活躍するための市民的素養を身に付けて修了証を手にする第1期生たちが、今後多文化社会の諸課題に積極的に取り組んでいってほしいと願っています。

多言語・多文化社会論入門の授業風景



KP(在日コリアンのラップユニット)をゲストに迎えて

部門	分野	修了に必要な最低単位数	主な内容
基礎部門(入門)		4単位(1・2学期)	日本の多言語・多文化化の現状(現場からのゲスト・スピーカーを多数お招きします)
理論部門	歴史と現在	2単位(半期)	日本と世界の多言語・多文化化の歴史
	社会・文化	2単位(半期)	多言語・多文化社会にかかわる理論
	政策と法	2単位(半期)	国内の外国人を取り巻く法や政策
	言語とコミュニケーション	2単位(半期)	異言語・異文化間の言語とコミュニケーションをめぐる問題
言語技能(LSP: Language for Specific Purpose)		4単位(1・2学期)	「教育」「医療」「災害」「行政」などに特化した言語表現や通訳技術の基本
実習部門		2単位(半期)	実習(ボランティア、インターンシップ)を取り入れた授業
プレゼンテーション部門		2単位(半期)	Add-on Programの仕上げとして学生がこれまでの経験を総括して発表
合計		20単位	

センターでは、国際理解教育専門員と学習支援専門員を支援室に配置し、学生のボランティア活動が高い教育的効果を生み出せるように支援しています。



年齢の近い大学生は子どもたちにとっても魅力的

去年の秋以降、学生ボランティアによる国際理解教育の実践の様子を見ながら感じたのは、日頃から外国の言葉や文化を学び、他者とのコミュニケーションについて体験的に考えている彼らの感覚の鋭さ、確かさです。それをベースに何人もの学生たちが知恵を出し合ってつくる国際理解の授業案は、とても刺激的で面白く、いろいろな課題提起を含んでいます。

子どもたちにとっても、自分たちと年齢の近いお姉さん、お兄さんの話は、とても魅力的なようです。授業の終わりに大学生が自分の夢を語る時など、明らかに教室の空気が変わるのが分かります。自分の夢があり、また、子どもたちに伝えたいメッセージがあることが伝わってくるからかもしれません。

(国際理解教育専門員 木下 理仁)



学んでいる言語が役立つことはわくわくする経験

学校の授業が分からない、友だちとうまくコミュニケーションがとれずに喧嘩をしてしまう。お父さん、お母さんは学校の勉強を手伝いたくても様子が分からない。言葉の通じない子どもを前に先生も困っている。そんなとき子どもたちの母語がわかり、文化についても知識のある学生の存在は、とても頼もしいものです。学生にとっても、学んでいる言語を誰かのために役立てることができるのは、わくわくするような経験になります。また言葉が「人」として持つ意味を実感し、考えるチャンスにもなります。学生たちは子どもたちの素直さや元気さに触れて子ども好きになってしまうようです。支援が終わってお別れを言う学生に、恥ずかしそうにすがりついている子どもの姿は、いつまでも心に残ります。

(学習支援専門員 河北 祐子)

グローバル化の中で国境を超えた人の移動はますます大きく、多言語・多文化化は世界的な動きになっています。そうした中で、移民、外国人労働者や先住民の人権・文化と社会統合に関わる問題など各国・各地域は共通の問題に直面しており、日本の多言語・多文化社会を考えるにも世界的な視点は欠かせません。

世界の多言語・多文化社会研究がスタートします

本学は、26の言語を正課として教授し、世界の言語・文化・社会について様々な分野の専門家が学際的な教育・研究を行っています。本センターでは、新年度からこうした本学の強みを活かし、世界の諸地域の社会・文化・政治を「多言語・多文化」という視点から比較検討する共同研究を行い、その成果をAdd-on Program に活用していきます。

連載

世界の多言語・多文化

今号から「世界の多言語・多文化」状況を、本学教員が執筆していきます。第1回目はオーストラリアです。

①オーストラリア



みなさんはオーストラリアについて、どのようなイメージをお持ちでしょうか。青い空と海、赤茶けた砂漠、コアラやカンガルー、シドニーのオペラハウスやハーバー・ブリッジ…そんなところでしょうか。

大学などで講義をしていて、意外と知られていないと思うのは、オーストラリアは全人口の約22%が国外出身の移民で、同じく約22%の住民が家庭で英語以外の言語を話し、全人口の約4割が、両親またはどちらかの親がオーストラリア以外の出身であるという、先進諸国のなかでも有数の多文化国家であるということです。とくに、シドニーやメルボルンといった大都市の多文化化には目覚ましいものがあります。シドニー・セントラル駅周辺の街頭に立って道行く人を眺めれば、その半分以上は白人以外の人々であることもしばしばです。郊外には、人口の5割以上がアジア系住民で占められる地区もあります。

かつてオーストラリア政府は、非英語系移民の移住を制限する「白豪主義」を採用していました。しかし第二次世界大戦以後、国防や経済成長における人口増加の必要から非英語系移民を大量に受け入れるようになり、1970年代には国内の文化的多様性を積極的に承認し、文化的差異にもとづく不平等や差別の是正をめざす「多文化主義」を国家理念として掲げることになりました。その後現在に至るまで、移民・難民に対する定住支援政策やさまざまな社会保障・福祉政策が実施されています。また近年では、こうした民族・文化的多様性はオーストラリアの経済や社会が発展していくための貴重な資源である、という考え方も定着しています。

もうひとつ、忘れてはならないのが先住民（アボリジニ・トーレス海峡諸島人）の存在です。ヨーロッパ人入植のはるか以前、一説には5万年前からこの地に住み続けてきたかれらは、独特の世界観に基づいた文化を培ってきました。しかし植民地

化によって征服されて以来、先住民社会は厳しい差別に直面し、その文化は同化の対象とされてきました。しかし多文化主義の開始以降、先住民の権利回復や文化復興も大きく進展しました。現在も依然として差別や貧困といった問題はありますが、オーストラリア社会の創造性や多様性を語るうえで、いまや先住民の存在はなくてはならないものになっています。

もちろん、多文化主義や先住民の権利回復に反対する風潮も根強く存在します。1980年代・90年代には反多文化主義・反アジア系移民・反先住民の運動が一定の力を得ましたし、1996年から2007年まで続いたハワード保守政権において、オーストラリアの多文化主義・先住民政策はかなり後退した感じがなめません。しかし、そうした厳しい時期をくぐりぬけて、多文化主義を支持するグラスルーツの運動は現在でもその力強さを保ちつづけています。2007年末に発足した労働党政権においては、長年の懸案であった、先住民に対してオーストラリア政府が過去に行った不正義への公式謝罪がついに実現し、オーストラリア中の人々がラッド首相の演説に耳を傾けました。

先進諸国における多文化主義政策の先駆的存在であるオーストラリアは、多言語・多文化社会化する日本における多文化共生のあり方を考えるうえで、重要なヒントを提供し続けているといえるでしょう。（塩原良和）



シドニー郊外のカプラマタ地区。同地区は東南アジアからの移民が集中していることで知られる。

2008年度 第3期センターフェロー決定

センターでは、新進の研究者や実践者に、実践的研究活動のキャリア形成を支援するため、「センターフェロー」制度を設けています。2008年4月～2009年3月を任期に、新たに8名にセンターフェローが委嘱されました。

猪熊末奈子	財団法人横浜市国際交流協会
金戸 幸子	東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻博士課程
末永サンドラ 輝美 高橋	群馬県太田市立太田小学校バイリンガル教員
高谷 幸	移住労働者と連帯する全国ネットワーク専従事務局長
奈良 雅美	社会福祉法人大阪ボランティア協会
松本 浩欣	相模女子大学中高等部教諭
村井 典子	早稲田大学大学院教育学研究科教育基礎学専攻博士後期課程4年
吉本 康子	国立民族学博物館外来研究員

在日ブラジル人児童むけ教材開発プロジェクト



ウェブ教材「掛け算」を公開しました!

今後は学習環境作りの活動も展開します。

「突然今まで聞いたこともない言葉で勉強しなければいけない」、「先生の教え方がこれまで自分が知っていたやり方と随分違う」。現在日本では在住外国人数の増加に伴い、こうした悩みを抱える外国人児童生徒が各地で急増しています。また指導者も異なる母語や習慣を身につけた子どもたちを目の前に、指導に戸惑いながら試行錯誤の日々を過ごしています。

こうした現実を背景に、本センターは社会連携活動の一環として、外国人児童のための教材開発に取り組んでいます。その第一歩として「在日ブラジル人子弟の教育支援」活動に取り組む三井物産株式会社の協力の下、2006年9月に「在日ブラジル人児童むけ教材開発プロジェクト」を開始し、2007年4月1日には、インターネット上から無料で自由にダウンロードできる教材として「在日ブラジル人児童のための教材」のうち「算数足し算・引き算教材」および「小学校一、二、三年生配当漢字教材」を公開しました。以来月平均6000を越えるダウンロードがされており、各地から数多くの喜びの声が寄せられています。

3月には算数教材「掛け算」をアップしました。小学校三年生までに習う掛け算の内容をわかりやすい日本語と楽しいイラストで学べる教材となっています。用語のポルトガル語訳やブラジルでの算数学習の考え方、計算方法なども盛り込みましたので、是非一度ご覧ください。今後は割り算教材の開発の他、教材の活用例やこれまで

に各地で作成されている教材を紹介することにより、充実した情報をより多くの方に提供していきます。

そして本プロジェクトでは教材を開発するだけでなく、ブラジル人が数多く在住する群馬県太田市・大泉町、静岡県浜松市、長野県上田市の三つの地域の教育委員会と連携し、教員研修の開催、教材の活用や環境づくりについて考えるフォーラムの開催といった活動も展開していきます。

こうして教材開発と教材普及のための環境作りを2本柱として、外国人児童生徒の教育状況が少しでも改善していくことをプロジェクトチーム一同願っています。

また、現在在日フィリピン人児童のための教材開発も進めており、近々皆様にお届けできる予定です。



フォーラム開催!

【第1部】パネルディスカッション
【第2部】分科会

日時 2008年7月27日(日)
10:00~16:00(予定)

会場 東京外国語大学 定員 200名

主催 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター 協力 三井物産株式会社
※詳細は後日メールマガジンやホームページ等でお知らせいたします。

在日ブラジル人児童のための教材 URL
<http://www.tufs.ac.jp/common/mlmc/kyouzai/brazil/index.html>

本学教職員・大学院生が
語学ボランティアとして活躍!

外国人のための
都内リレー専門家相談会

本センターでは、在住外国人に対する言語面の支援として、「外国人のため都内リレー専門家相談会」に語学ボランティアとして協力しています。2007年度には全16箇所のうち3箇所で行われた相談会に参加しました。

2007年度・実績

参加した教職員及び大学院生	延べ20名
通 訊 言 語	8言語(韓国・朝鮮語、英語、スペイン語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語、フランス語、タイ語)
参加した相談会	①9月22日/東京都南部労政会館(品川区)/主催:NPO法人CINGA ②10月13日/弁護士会館(千代田区)/主催:関東弁護士会連合会 ③2月23日/あんさんぶる荻窪(杉並区)/主催:杉並区交流協会

本センターに登録している通訳ボランティアは、26名、11言語(韓国・朝鮮語、英語、スペイン語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語、フランス語、タイ語、インドネシア語、トルコ語、フィリピン語)を数えるまでになりました。本年度も、本学の強みである語学を活かした社会連携活動として協力を進めていきます。

「多文化社会 コーディネーター養成講座」 受講者募集!

本センターでは文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」の委託事業として「多文化社会コーディネーター養成プログラム」を開発・実施しています。このプログラムの核となる「多文化社会コーディネーター養成講座」を8月より開講します。多言語・多文化化する現場で働く実務家（実践者）を対象に3つのコースを用意しています。奮ってご応募ください!

コースと対象者

①政策コース(定員:10~15名)

外国人受入施策や多文化対応施策をコーディネーションする立場にいる国際交流協会、行政、企業の中堅スタッフ

②学校教育コース(定員:10~15名)

外国人児童生徒の支援活動をコーディネーションする立場にいる教職員、教育委員会職員など

③市民活動コース(定員:10~15名)

地域で日本語支援や生活相談、また国際交流活動を行っている機関・団体の中心スタッフ

講座の流れ

共通必修科目(8月:5日間) ※3コース合同

9月:3日間
2月:2日間
※3コース別

個別実践研究
10月~2月

応募方法

1. 提出書類

- ①申込書(所定の用紙で。本センターホームページよりダウンロードしてください。)
- ②職務経歴および活動経歴(自由書式)
- ③小論文(A4 1枚 1000字程度)

テーマ「多文化社会とコーディネーター」

※現場の経験における問題意識をベースに、コーディネーターの必要性や役割について記述いただきます。

2. 募集期間

4月15日(火)~5月30日(金)(消印有効)

■応募者が多数の場合は選考のうえ、結果は6月中旬以降に通知します。

※講座の詳細い内容をお知りになりたい方は、「募集要項」をご覧ください。募集要項は、本センターホームページに掲載しています。

研究誌「多言語多文化—実践と研究」を 創刊します!

多言語・多文化化する社会における課題を直視し、解決策を考えていこうとする、あらゆる領域の研究者・実践者による原稿を収録しています。ご希望の方には無料で差し上げます。5月以降に、情報を本センターホームページにアップしますのでご覧ください。

まもなく 刊行! シリーズ 多言語・多文化協働実践研究

協働実践研究における各研究班の活動のプロセスの記録として、2007年度に行われたプレフォーラムおよび全国フォーラムでの発表や議論を中心に編集・発行します。(全6冊:5月下旬頃)。ご希望の方には無料で差し上げます。詳細は、ホームページでご案内しています!



左から「多言語・多文化ブックレット」
研究誌「多言語多文化—実践と研究」
シリーズ「多言語・多文化協働実践研究」

シリーズ 多言語・多文化協働実践研究

No.1 第1回 協働実践研究・全国フォーラム全体会

時はいま、「協働実践研究」はじめての一步
—非収奪型研究と社会参加—

No.2 「阿部・井上班」07年度活動

共生社会に向けた協働のモデルを目指して
—長野県上田市 在住外国人支援から見えてきた課題と展望—

No.3 「渡戸・関班」07年度活動

越境する市民活動~外国人相談の現場から~
行政区を超えた連携
—東京都町田市・神奈川県相模原市—

No.4 「佐藤・金班」07年度活動

外国につながる子どもたちをどう支えるのか
当事者も参加した拠点・ネットワークの構築
—川崎市での実践—

No.5 「野山班」07年度活動

地域日本語教育から考える共生のまちづくり
言語を媒介にともに学ぶプログラムとは

No.6 「山西・小山班」07年度活動

コーディネーターって、なんだ!?
多文化社会での役割・資質・育成プログラム

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

26の言語を本学では教授していますが、言語は実際に使用してこそ、学ぶ価値があるのだと思います。日本社会が多言語・多文化化する中で、海外だけでなく国内においても、世界諸地域の言語を使う機会は増えています。本学の学生達が、自らの言語を活かしますます活躍していくことを陰ながら願っています。(J)

発行 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター
〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟319号室
Tel 042-330-5441 Fax 042-330-5448
E-mail tc@tufs.ac.jp
URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer>